様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２５９２

研究課題名（和文）異文化受容及び文化変容としての森鴎外初期翻訳作品の研究

研究課題名（英文）A study of early translational works of Mori Ogai in the perspective of acceptance of other cultures and cultural transformation

研究代表者
中　直一（NAKA, Naoichi）

大阪大学・言語文化研究科（言語文化専攻）・教授

研究者番号：５０１４３３２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究に於て、主に以下の研究成果が得られた。(1)森鴎外の初期翻訳では、原文独語の構文を敢えて変形して和訳し、訳文に於る過去形の羅列を避ける技法が見られる。(2)初期の翻訳の中で、原文にない文章が付加されるケースがある。(3)これとは逆に省略も見られる。(4)初出と全集版では異同が見られる場合のあることが明らかになった。(5)鴎外の翻訳には、少年向け翻訳でルビを多用する等、読者層を意識した訳文が見られる。(6)鴎外の翻訳の中には、抄訳とも言える翻訳も散見される。(7)後の時代になると、鴎外の翻訳を批判する批評家も出現した。(8)研究期間中に、鴎外の翻訳底本の多くの複写を収集し得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　森鴎外の翻訳についての研究は、翻訳学の観点のみならず、異文化受容の観点からも学術的意義があるものと考えられる。即ち、森鴎外の翻訳家としての活動を分析することにより、鴎外がドイツ語原文を逐語的に日本語に訳したのではなく、かなり自由に翻訳したことが解明されたが、これは鴎外が、当時の読者にとって異文化を受容しやすいように工夫を行った結果であると目される。また本研究は、翻訳が社会に及ぼす影響を､明治中期の実例をもって明らかにすることを通じ、現代における翻訳と社会の関係を考察する題材を与えるものであり、この観点からの社会的意義を有するものである。

研究成果の概要（英文）：The main results of this research are as follows. (1) In Mori Ogai's translational works, there are translations that are conscious of the reader's readiness to avoid the situation where the past tense continues in the translation by intentionally transforming and translating the original German syntax. (2) Sentences that are not in the original texts are often added in the early translations of Mori Ogai. (3) On the contrary, some omissions are also seen in Ogai's translations. (4) In the translated works by Ogai, it was revealed that there may be differences between the first appearance and the complete version. (5) In Ogai's translational works, there are some translations that are conscious of the readership. (6) In Ogai's translations, there are some translations that can be called abstract translations. (7) In later times, critics appeared to criticize Ogai's translations. (8) During the research period, we could collect many copies of original texts of Mori Ogai's translation.

研究分野：人文学

キーワード：森鴎外　比較文学　翻訳　ヨーロッパ文学　異文化理解

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

（1）研究開始当初の研究動向および位置づけ

研究開始当初、まず参照した文献は、小堀桂一郎『森鷗外 ― 文業解題　翻訳篇』(岩波書店、1982 年）である。同書により、鷗外の翻訳原典がいかなるものであったのかという問題は、ほぼ完全に解明されている。鷗外はドイツ文学以外にも、英米文学、フランス文学、デンマーク文学、さらにはロシア文学やスペイン文学等、様々な国の文学作品を翻訳しているが、小堀氏の研究により、鷗外が主にドイツ語訳から日本語に重訳したことが解明されている。

本研究においては、このような研究動向を踏まえ、鷗外の訳業のなかでも、とくに青年期（ドイツ留学から帰国後数年）の翻訳作品に着目するものである。本研究開始以前の予備的研究により、青年期鷗外の訳業は、時に「翻訳」の範疇を離れるくらいに自由奔放であり、単に「翻訳学」の観点からでは評価しきれない性質を含むものであることがわかっていた。鷗外のこのような翻訳手法の更なる解明が、本研究開始の動機となった。

（2）本研究の着想に至った経緯

鷗外の翻訳については、従来より様々な研究が進められてきた。だがその多くは、鷗外の翻訳作品の「文学的価値」を考察し、あるいはその語彙使用を検討するものが中心であった。これらは、いわば「鷗外の翻訳を、鷗外文学の内側から見る」という方向であると言える。

本研究代表者は明治期を中心とする「異文化理解としてのドイツ文化の日本における受容」を研究テーマとしてきたものである。その観点から、鷗外の青年期の訳をみると、原文にない勝手な付加を、案外平気で自己の訳文の中に盛り込んでいる。たとえば、「何と女房に言い分けをしよう」という意味のドイツ語文を、鷗外は「まあ、何と女房に言譯をしやう。さてさて困つた」と訳している。訳文の後半は、原文にはない。鷗外が勝手に付け加えた部分である。そしてそのような例は、青年期の鷗外の翻訳作品の中に、実は随所に見られることが分かってきた。

現代では、否、明治後期にあってさえ、このような訳は「学問的でない、勝手な書き換え」として断罪の対象になろう。青年期の鷗外は何故、このような翻訳を敢えてなしたのか。こうした素朴な疑問が、本研究の着想を得た出発点である。

２．研究の目的

本研究は次の３つの研究目的を有する。

（1）青年期の森鷗外がなした自由奔放な（勇み足とも言える）「翻訳」の実態を、(a)省略、(b)改変、(c)創作的付加の観点から解明し、更に鷗外の訳業を明治翻訳史の中に位置づける。

（2）鷗外のこうした訳業を、翻訳学の観点からではなく「異文化受容・文化変容」の観点から再評価する。

（3）また更に、「翻訳」なるものを、単に「横のものを縦にする」作業と捉えるのではなく、むしろ「異文化を理解し受容するための積極的な営為」と把握する。この立場から「文化変容としての翻訳」についての理論的考察を行う。

これら３つの大きな研究目的を遂行するため、次の個別的・具体的な研究目的を設定した。

鷗外はドイツ文学のみならず、英文学や仏文学、ロシア文学やスペイン文学等、様々な言語の文学を翻訳しているが、上掲の小堀桂一郎氏の研究で明らかなように、鷗外はそれらの殆どをドイツ語訳から重訳している。鷗外はドイツ語訳を、ドイツ留学中に買い集めたが、こうした独訳本の多くはレクラム文庫や手軽な「外国文学選集」であり、今日のドイツでは絶版になって久しい。鷗外が使用した版本は、この様に手軽な版本が多かっただけに、厳密な校訂を経た全集本に比して、脱落や遺漏の存在が予想される。鷗外が、こうした版本を翻訳底本として使用していた以上、その翻訳を研究する我々も、現在刊行されている刊本でなく、昔の版本をこそ、研究の対象としなければならない。

そのため本研究においては、東京大学「鷗外文庫」に収められている、こうした 150 年近く昔の鷗外手沢本の複写を、３年間の研究期間中にできる限り取り寄せ、電子データ化することを、本研究の補足的な研究目的とした。

３．研究の方法

本研究においては、各年度において個別の研究テーマを設定し、それらを最終年度に総合的に考察する、という方法を採用した。

（1）第１年度《鷗外のドイツ留学と鷗外自身の異文化経験についての個人史的研》

本研究は、「翻訳家としての鷗外」が、明治日本の読者に対し、いかにして異文化としての西洋世界・ヨーロッパ文学を媒介したかを研究課題とする。つまり鷗外を「異文化の媒介者」と見る立場に立っているわけだが、その鷗外とて、無色透明の翻訳機械ではなく、一人の生身の人間として、異文化ドイツを経験している。平成 29 年度は、鷗外が一個人としていかにドイツと関わったかを考察する。

（2）第２年度《翻訳発表のメディアと翻訳文体・翻訳流儀の相関関係についての研究》

ドイツ留学帰国後の鷗外は、創作活動のかたわら、様々な新聞・雑誌に西洋文学の翻訳を寄稿している。注目すべきは、メディアの違いにより、翻訳文体を変えている、ということである。本研究代表者の予備調査によれば、政治評論を中心とした、いわゆる「大新聞」には、青年期の鷗外は文語調の訳文で翻訳を掲載している一方、日常の事件やゴシップ記事を売り物にしていた「小新聞」に翻訳を掲載する場合は、言文一致体（口語調）の訳文を試みている。

言文一致体の訳文において、鷗外はより大胆に、翻訳原本から省略したり、勝手な付け加えをしているのではないかとの推測が成り立つのか、この点について検証を進める。
（3）第３年度《鷗外の翻訳への、文壇人・批評家の評価についての研究》
最終年度の課題は、青年期に敢えて自由奔放な訳をなしていた鷗外が、いつ頃、何故、厳密正確な翻訳姿勢に転じたのか、という問題の解明にあてられる。本研究代表者の仮説では、文壇や批評家からの鷗外訳批評がひとつのきっかけとなったようである。上田敏（1874～1916）は、ある会合で「鷗外さんなんか誤訳だらけだ」と発言して周囲の人を驚かせたが、中年以降の年齢になった鷗外に対し、ドイツ語教師の中から、たとえば向軍治（1865～1943）のように、鷗外の訳をドイツ語原文と対比して、ことさらその誤訳を指摘する、という人物も現れ始めた。
このような翻訳批評が成り立つ背景には、明治中期・後期に至ると、日本の読者の西洋理解が進み、「日本人向けに味付けされた訳文」よりも「原作に忠実な文学世界」を求める、という、異文化受容に対する意識の変化があったと推測される。
第３年度は、この問題の解明にあたるべく、鷗外を取り巻く文壇人や批評家の「翻訳批評」に焦点を当て、かつ第１年度及び第２年度に得られた知見を総合的に考察する。

４．研究成果
（１）初期鷗外の翻訳作品において、原文ドイツ語の構文で「～においてＡはＢした」となっているところを、あえて「ＡがＢしたのは～においてである」という風に訳している箇所があることが解明された。たとえば Tolstoi, Luzern において„Gegen halb acht wurde ich zum Diner gerufen“ (Tolstoi, S.7)（直訳すると、「７時半ごろ、私はディナーに呼ばれた」となる）を、鷗外訳「瑞西館」においては、「余が「ヂネエ」の卓に呼び出されしは七時半の頃なるべし」（鷗外全集第１巻 p.327）と 訳している。これは原文で過去形が続く表現になっているところを、訳文において現在形を織り交ぜることによって、過去形の羅列を避ける意図があったものと目される。このような翻訳術は、初期鷗外の言文一致体の訳業である「新浦島」にも見られる。
（２）鷗外の訳文には、原文にない文言が創作的に付加された箇所があることが解明された。それらの多くは、登場人物（とくに主人公）の心情を吐露するような文言であり、あたかも訳者鷗外が原著者になり代わって創作的に付加したかの如き感を与える。たとえば､クライストの「聖ドミンゴ島での婚約」を訳した「悪因縁」では、現代訳で「しかし、トーニのほうは前の質問には答えず、第二の質問に対してだけ、からむ腕から身をほぐしながら、／「だめ、わたしを愛してるなら、一言もいわないで」／罠にはめるためのこうした手段が着々と進められていくのを見て、トーニは不安を覚えたが、それをぐっとこらえた。客の朝食の用意がありますからととりつくろって、下の居間へと急いで駈けおりて行った。(佐藤訳、p.131)となっているところを、鷗外は「娘は母もや見ると氣遣ふさまにて 客の手をほどき、此身をだに棄てたまはずばいかでか告げむ。／母の詭計を目の前に見る少女の心苦しさはいかならむ。さればとて眞を告げむよしなければ、まらうどに朝げまゐらせばやといひさして、急ぎて梯を下りぬ。」(鷗外全集第１巻 p.496)と訳している（下線部が鷗外の付加部分）。これは、青年と娘の秘密の逢い引きを、娘の母に見とがめられはすまいかと娘が心配する場面であるが、鷗外訳では、母の目を気にする娘の様子が創作的に付加されており、さらに鷗外訳では、母の詭計を青年に打ち明けることの出来ぬ少女の板挟みの心情も書き加えられ、原作よりも少女の困惑を強調した文章となっている。
（３）鷗外の訳文には、原文の一部を敢えて訳出していない場合のあることが分かった。たとえば「悪因縁」では、男女の一夜の関係を暗示する文章„Was weiter erfolgte, brauchen wir nicht zu melden, weil es jeder, der an diese Stelle kommt, von selbst lies't.“ (Kleist, S.73) の一文が訳出されていない。これは、訳者鷗外の中に、明治の読者に対して男女間の事柄をあまり詳しくは述べたくないという心理が働いた可能性があるものと目される。
（４）鷗外の訳文において省略されたと見えた箇所が、実は初出では訳されている事例の存在が確認された。たとえばアーヴィングの「リップ・ヴァン・ウィンクル」を訳した「新浦島」においては､原文の„ selbst dieser der am schlechtesten bestellte Besitz in der Nachbarschaft war“(Irving, S.60)が訳出されていないが、鷗外訳の初出（当時のタイトルは「新世界の浦島」で『少年園』に掲載）では､原文のままに「この畑さへ何時見ても､村中で一番荒れて居りました」(少年園第 13 號 p.12)と訳されている。
（５）翻訳の読者層を意識して、鷗外が訳文中にルビを多様したり、訳文の文体を工夫したりするケースのあることが分かった。たとえば少年向けの雑誌『少年園』に掲載された「新世界の浦島」（原作はアーヴィングの「リップ・ヴァン・ウィンクル」）および「戰僧」（原作は、ドーデー「従軍僧」）においては、難読漢字のみならず、かなりの数の漢字にルビが振られている。ところが、後に『水沫集』に収められた際には、こうしたルビの多くが削除され､『水沫集』（改訂版）を底本とする岩波版鷗外全集でも初出のルビが保持されず、結果的に少年向の雑誌に掲載された訳文の面影が多少とも減ずることとなっている。
（６）鷗外の翻訳の中には、原作のかなりの部分を省略した、抄訳ないし部分訳とも言えるものがあることが確認された｡今回収集した鷗外訳の底本ドイツ語との対比の結果､ルソー｢懺悔記｣

やフレンツェル「女丈夫」では、かなりの省略があり、とくに「女丈夫」では鷗外の訳文が翻訳底本のどの部分に対応するのかの同定に非常に時間を費やす結果となった。
（７）鷗外が翻訳にあたり、口述筆記を多用していたことが、鷗外訳『フアウスト』に対する向軍治の批評から明らかになった。向軍治は、『新人』に掲載された「森鷗外博士譯『フアウスト』を評す」の中で「間違ひだらけの飜譯を筆記さしたまゝで、讀み返しもしないで、出版させるらしい」と述べており、実際「昔の儘の節博士で」という鷗外の初出訳が「昔の儘の節任せで」の聞き間違いであった可能性を指摘している（新人 pp.21-33）。
（８）以上のような研究成果の基礎となったのは、研究期間中に入手した、鷗外が翻訳の際に使用したドイツ語原書（翻訳底本）の複写である。
① まず、東京大学「鷗外文庫」に所蔵されているドイツ語書籍から、以下のものに関し、その複写を入手した。
・Daudet, Alphonse, *Aus der Kanzlei des Todes*. In: A. Daudet, *Aus dem Leben*. Deutsch von Dr. Adolf Gerstmann. 2. Aufl. Dresden & Leipzig, Verlag von Heinrich Minden. 1886.（「みくづ」翻訳底本）
・Daudet, Alphonse, *Der Feldprediger*. In: A. Daudet, *Aus dem Leben*. Deutsch von Dr. Adolf Gerstmann. 2. Aufl. Dresden & Leipzig, Verlag von Heinrich Minden. 1886.（「戰僧」翻訳底本）
・Daudet, Alphonse, *Kadur und Käthe*. In: A. Daudet, *Aus dem Leben*. Deutsch von Dr. Adolf Gerstmann. 2. Aufl. Dresden & Leipzig, Verlag von Heinrich Minden. 1886.（「緑葉歎」翻訳底本）
・Frenzel, Karl, *Charlotte Corday*. In: K. Frenzel, *Gesammelte Werke* (in 6 Bdn.). Bd. V. *Antoine Watteau, Charlotte Corday*. Leipzig, Wilhelm Friedrich.1891.（「女丈夫」翻訳底本）
・Hackländer, Friedrich Wilhelm, *In eine Dachkammer wird eine Schlafgängerin gesucht und ist daselbst eine Kinderbettlade zu verkaufen*. In: F. W. Hackländer, *Geschichten einer Wetterfahne*. Stuttgart, Verlag Krabbe. o. J.（「黄綬章」翻訳底本）
・Hackländer, Friedrich Wilhelm, *Zwei Nächte*. In: Paul Heyse & Hermann Kurz (ed.), *Deutscher Novellenschatz* (in 24 Bdn.). Bd.XXIII. München, Verlag von Rudolph Oldenbourg. 1873.（「ふた夜」翻訳底本）
・Kröger, Timm, *Socrates Tod*. In: T. Kröger, *Mit dem Hammer. Novellen und Skizzen*. Hamburg, Alfred Janssen. 1906.（「ソクラテエスの死」翻訳底本）
・Lessing, Gotthold Ephraim, *Emilia Galotti*. In: G. E. Lessing, *Werke* (in 5 Bdn.). Bd. II. Leipzig, Verlag des Bibliographischen Instituts. o. J.（「折薔薇」翻訳底本）
・Lessing, Gotthold Ephraim, *Philotas*. In: G. E. Lessing, *Werke* (in 5 Bdn.). Bd. II. Leipzig, Verlag des Bibliographischen Instituts. o. J.（「俘」翻訳底本）
・Schäfer, Wilhelm, *Der Vater*. In: W. Schäfer, *Die Zehn Gebote, Erzählungen des Kanzelfriedrich*. Berlin, Verlag Schuster & Loeffier. 1897.（「父」翻訳底本）
・Schubin, Ossip, *Die Geschichte eines Genies*. In: P. Heyse & Ludwig Laistner (ed.), *Neuer Deutscher Novellenschatz*. (in 24 Bdn.). Bd. XL München, Verlag von Rudolph Oldenbourg. 1884.（「埋木」翻訳底本）
・Stern, Adolf, *Die Flut des Lebens*. In: P. Heyse & L. Laistner (ed.): *Neuer Deutscher Novellenschatz* (in 24 Bdn.). Bd. III. München, Verlag von Rudolph Oldenbourg. 1884.（「うきよの波」翻訳底本）
② また以下のものは、鷗外が訳出した部分の殆どが東京大学総合図書館「鷗外書入本画像データベース」に公開されているので、そこからドイツ語文を入手した。
・Clauzevitz, Carl von, *Vom Kriege*. In: C. V. Clausewitz, *Hinterlasse Werke in 10 Bdn*. Bd. I. *Vom Kriege*. Erster Theil. Berlin, bei Ferdinand Dümmler. 1832.（「大戰學理」翻訳底本）（同書の S.194 のみ画像データベース上で公開がないため、鷗外文庫より複写を入手）
③ 東京大学鷗外文庫所蔵本が劣化等のため複写が不可能であった場合は、鷗外文庫と同じ版本の複写を、別の研究機関から取り寄せた。それらは、以下のものである。
・Andersen, Hans Christian, *Der Improvisator*. Deutsch von H. Denhardt. Leipzig, Verlag von Philipp Reclam jun. o. J.（「即興詩人」翻訳底本)
・Goethe, Johann Wolfgang von, *Faust*. In: J. W. v. Goethe, *Goethes Faust*. 1. u. 2. Teil. Mit einer Einleitung und Anmerkungen. Herausgegeben von Otto Harnack. Kritisch durchgesehene Ausgabe. Leipzig & Wien, Bibliographisches Institut. 1908.（「フアウスト」翻訳底本）
・Rilke, Rainer Maria, *Familienfest*. In: R. M. Rilke, *Am Leben hin. Novellen und Skizzen*. Stuttgart, Verlag von Adolf Benz. 1898.（「祭日」翻訳底本）
・Rilke, Rainer Maria, *Flucht*. In: R. M. Rilke, *Am Leben hin. Novellen und Skizzen*. Stuttgart, Verlag von Adolf Benz. 1898.（「驅落」翻訳底本）
・Rilke, Rainer Maria, *Greise*. In: R. M. Rilke, *Am Leben hin. Novellen und Skizzen*. Stuttgart, Verlag von Adolf Benz. 1898.（「老人」翻訳底本）
・Rousseau, Jean-Jacques, *Die Bekenntnisse*. I und II. Deutsch von H. Denhardt. Leipzig, Verlag von Philipp Reclam jun. o. J.（「懺悔記」翻訳底本）
・Tolstoi, Lev Nikolaevich, *Luzern. Aus dem Aufzeichnung des Fürsten Dmitri Nechludoff*. In; L. Tolstoi: *Luzern. Familienglück. Zwei Erzählungen*. Deutsch von W. Lange. Leipzig, Verlag von Philipp Reclam jun. o. J.(「瑞西館」翻訳底本)
④ 本科研研究の期間（平成 29～31 年度）以前に、代表者は以下の書籍の複写を東大鷗外文庫

より入手しており、今回の研究期間においても、それらを十全に活用した。

・Hofmann, Ernst Theodor Amadeus, *Das Fräulein von Scuderi*. In: E. T. A. Hoffmann, *Werke, ausgewählte Erzählungen* (in 2 Bdn.). Bd. 1. Leipzig, Verlag des Bibliographischen Instituts. o. J.（「玉を懐いて罪あり」翻訳底本）

・Irving, Washington, *Rip van Winkle*. In: W. Irving, *Skizzenbuch*. Deutsch von Karl Theodor Gaedertz. Leipzig, Verlag von Philipp Reclam jun. o. J.（「新浦島」翻訳底本）

・Kleist, Bernd Heinrich Wilhelm von, *Das Erdbeben in Chili*. In: H. v. Kleist, *Sämmtliche Werke* (in 2 Bdn.). Bd. II. Leipzig, Verlag von Philipp Reclam jun. 1885.（「地震」翻訳底本）

・Kleist, Bernd Heinrich Wilhelm von, *Die Verlobung in St. Domingo*. In: P. Heyse & H. Kurz (ed.), *Deutscher Novellenschatz*. (in 24 Bdn.). Bd. I. München,Verlag von Rudolph Oldenbourg. 1871.（「悪因縁」翻訳底本）

・Kinigge, Adolf Freiherr von, *Über den Umgang mit Menschen*, In: A. F. v. Knigge, *Über den Umgang mit Menschen*. Leipzig, Druck und Verlag von Philipp Reclam jun. o.].（「知恵袋」翻訳底本）

・Kopisch, August, *Ein Carnevalsfest auf Ischia*. In: P. Heyse & H. Kurz (ed.), *Deutscher Novellenschatz* (in 24 Bdn.). Bd. V. München, Verlag von Rudolph Oldenbourg. 1871.（「はげあたま」翻訳底本）

⑤ なお、以下の書籍は、東大鷗外文庫所蔵本が劣化のため複写不可能であり、かつ他研究機関では所蔵していなかったものである。また google books でも入手できず、今後複写入手の方途を検討したい。

・Harte, Francis Bret, *Sturmflut*. B. Harte, *Californische Erzählungen*. Bd. III. Deutsch von W. Lange. Leipzig, Verlag von Philipp Reclam jun. o. J.（「洪水」翻訳底本）

＜引用文献と略号＞

鷗外全集＝『鷗外全集』第 1 巻、岩波書店、1971 年

佐藤訳＝佐藤恵三訳「聖ドミンゴ島での婚約」『クライスト全集』第 1 巻、沖積舎、1998 年

少年園＝『復刻版少年園』、不二出版、1988 年

新人＝『新人』14 巻 8 号、1913（大正 2）年

Irving＝W. Irving, *Rip van Winkle*. In: W. Irving, *Skizzenbuch*. Deutsch von Karl Theodor Gaedertz. Leipzig, Verlag von Philipp Reclam jun. o. J.

Kleist＝B. H. W. v. Kleist, *Die Verlobung in St. Domingo*. In: P. Heyse & H. Kurz (ed.), *Deutscher Novellenschatz*. (in 24 Bdn.). Bd. I. München,Verlag von Rudolph Oldenbourg. 1871.

Tolstoi＝L. Tolstoi, *Luzern. Familienglück. Zwei Erzählungen.* Deutsch von W. Lange. Leipzig, Verlag von Philipp Reclam jun. o. J.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 中直一	４．巻 6
２．論文標題 鴎外訳「悪因縁」と翻訳原本―訳者による削除と付加をめぐって―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 言語文化の比較と交流	６．最初と最後の頁 1～12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/72775	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中直一	４．巻 5
２．論文標題 出島三学者の日本人論　―　日本人の国民性をめぐって ―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 言語文化の比較と交流	６．最初と最後の頁 7～15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/69924	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中直一	４．巻 4
２．論文標題 初期鴎外の翻訳に見られる創作的付加について　―　鴎外訳「新浦島」における主人公への感情移入　―	５．発行年 2017年
３．雑誌名 言語文化の比較と交流	６．最初と最後の頁 1～10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/62046	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考